8月25日　国際文化学部臨時教授会での意見集約

国際文化学部長　黒川修司

1）「大学改革案の大枠の整理について」（以下改革案と省略）には、今回の改革の必要性が説得的に書かれていない。現状の問題点を指摘し、改革の必要性を述べ、改革案が出てくるという論理一貫性がない。

2）博士課程の廃止には反対である。そもそも博士課程はコストをかけずに設置された経緯があり、人数（3名）は少ないものの優秀な院生を育てることは大学のイメージにも大切である。また文部科学省のＣＯＥに応募できる条件は大学院博士課程を有する大学である。時代の要請に答えているＤＣを廃止することは納得できない。

3）教養を重視する「リベラル・アーツ」を標榜しながら、「横浜アカデミア」を取り上げていないのは不満である。3学府案は新鮮さがない。「リベラル・アーツ」を教育目標に掲げるならば、1年次の学生教育を重視するべきである。

4）受験生から見て正体が不明な「国際総合科学学部」になっている。理念も実体もない新学部であり、何こヴィジョンが出ていない。

5）学生が希望しているのは専門教育であり、教養ではない。「プラクチカルなリベラル・アーツ」は矛盾した概念であり、教育目標にはなりえない。

6）「国際教養学府」では伝統ある「文科」がなくなる。「国際文化学府」ではなぜいけないのか。「国際文化・教養学府」はどうか。

7）教授会は改革案ではどこに位置づけられるのか？またその権限はどうなるのか？

8）「教育研究機関」の主な審議事項に教員人事を明記するべきである。

9）教員の任期制の導入には慎重にすべきである。

１０）入試は外部評価に耐えられるように学府ごとに実施すべきである。